「日々の理科」（第 2756 号）　2022,-2,-3

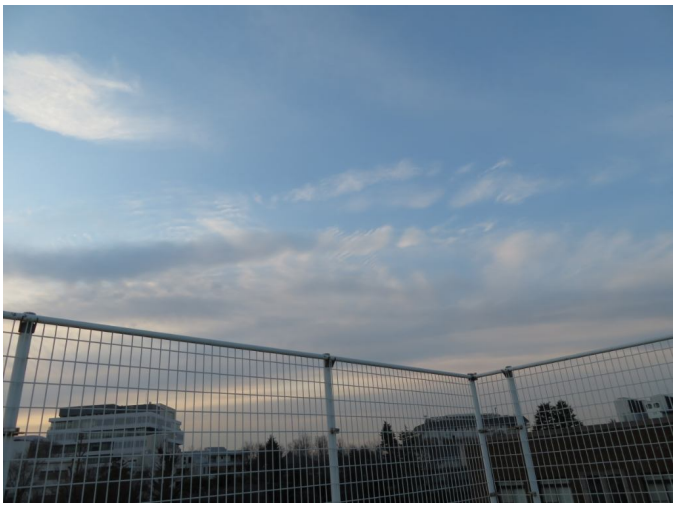
「節分の日の空模様（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

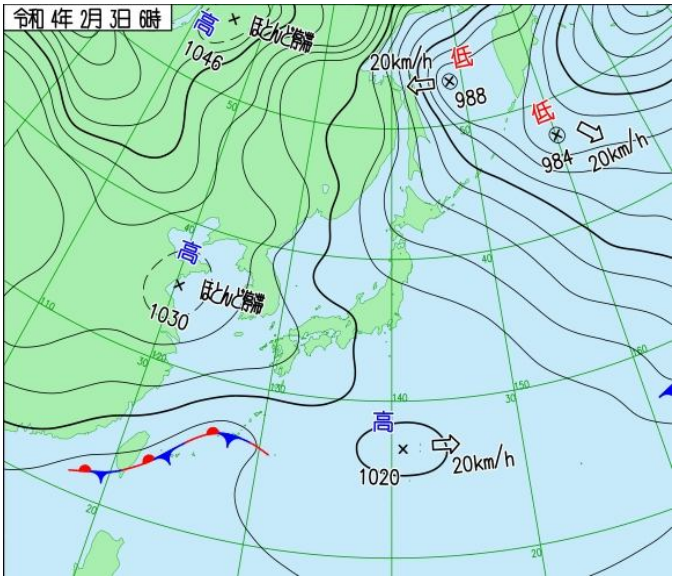
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

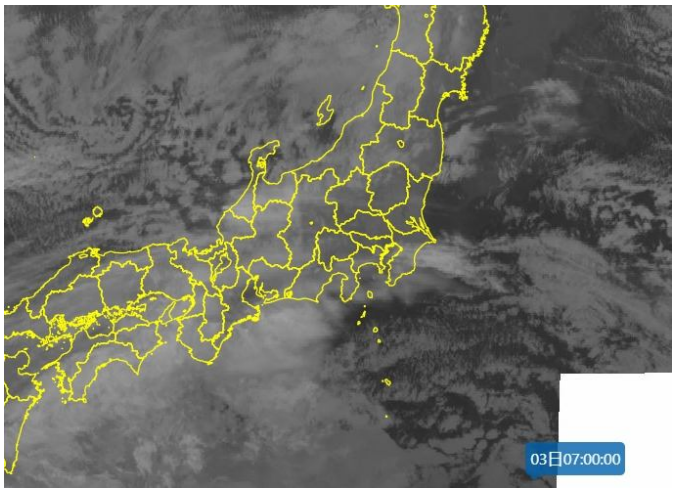
今日は「節分」だった。暦の上では「冬と春の境目」の日である。今年の東京は寒く、まだやっと梅の花が咲いているぐらいなので、明日の「立春」も名ばかりになりそうだ。



今朝の東京の空模様は面白かった。巻雲、巻層雲、巻積雲など、さまざまな上層雲が見られた。いずれも高度 8000 メートル以上の、氷晶で形成されている雲である。



今朝の天気図を見ると、太平洋の「弱い移動性高気圧」が東に去り、南西諸島付近に「への字」に曲がった停滞前線が見られる。この「気圧の谷」は、いずれ「南岸低気圧」になることは明らかだが、まだ低気圧になっていないので、移動方向や時速表示はない。



今朝の衛星画像（赤外）を見ると、全国的に雲が多いが、関東南部には「薄雲」がかかっているように見える。この「薄雲」が上層雲の正体だ。

写真は「波状巻積雲」という雲だ。高度 8000 メートル付近に現れる氷晶の雲で、非常に薄い・・・つまり厚みがない。この雲自体が、雨や雪を降らせることは、まずない。

波状雲は、その付近の大気に「上下の揺らぎ」があることを可視化している。水蒸気を持った気塊が、大気のゆらぎによって上下しながら移動することで、より高い位置で露点に達し、氷晶が形成されるのだろう。